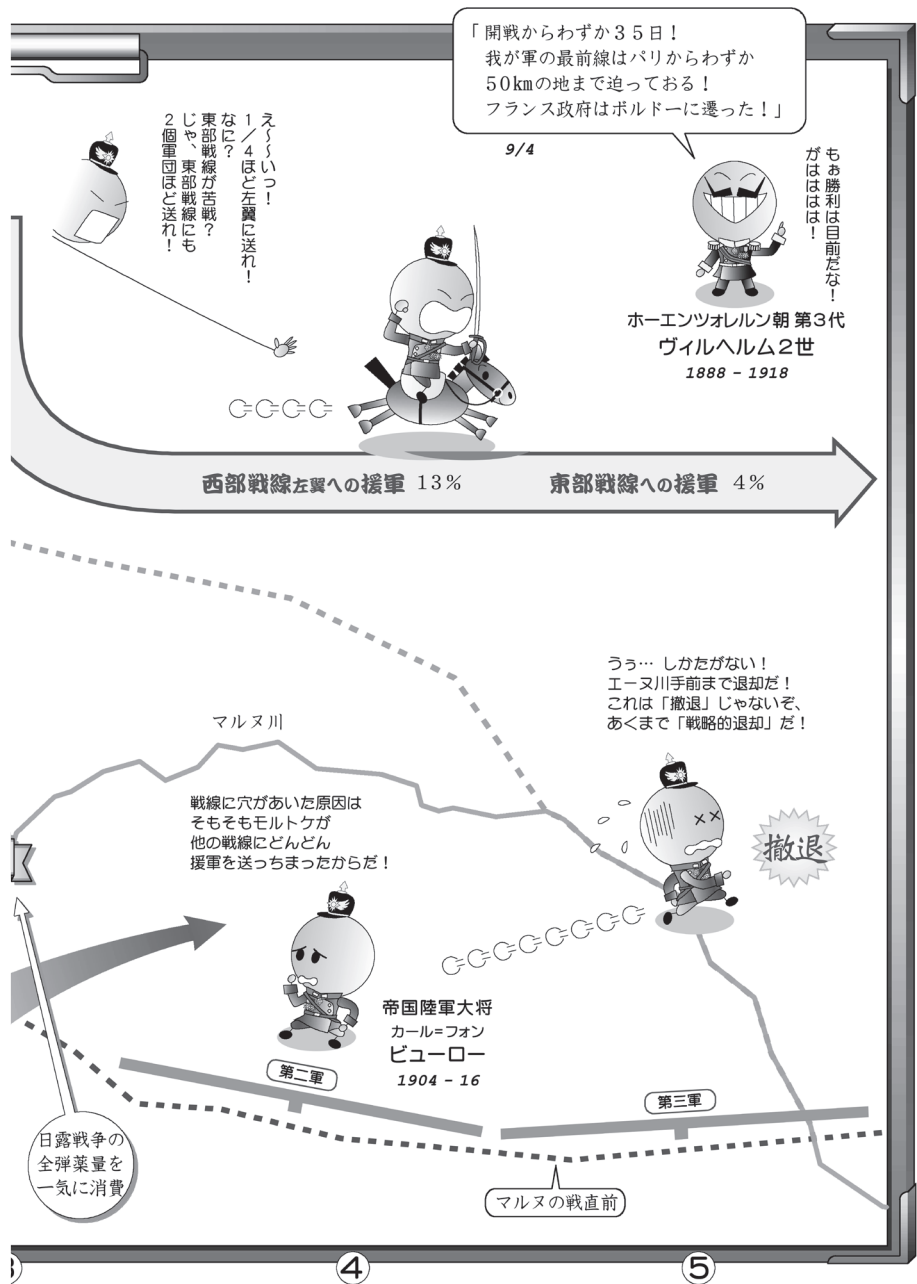
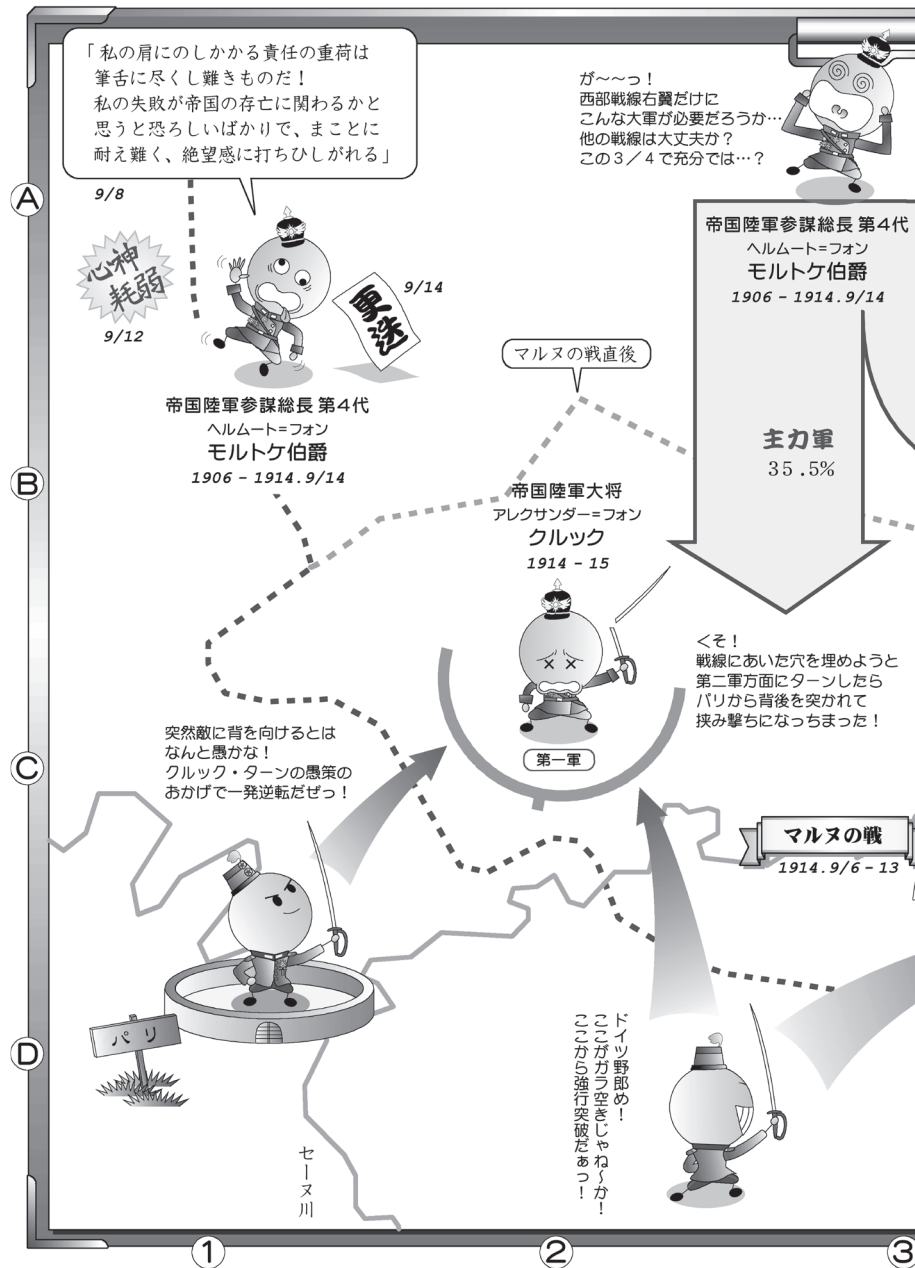


〈マルヌ会戦〉



開戦からまだ35日しか経っていないというのに、ドイツ軍は、早くも、パリまでわずか50kmのところまで肉薄し、フランス政府はボルドーへ逃げていきます。

先の普仏戦争でも、当時のフランス政府は、ボルドーに拠点を遷しましたので、これはまさしく普仏戦争の再現です。

これには皇帝も上機嫌。(A-5)

「愉快、愉快！」

勝利は目前であるぞ！！」

しかし、帝国陸軍参謀総長の小モルトケ(A-3)は、戦果が順調であればあるほど不安になります。(*01)

が〜っ！
西部戦線右翼だけに
こんな大軍が必要だろうか…
他の戦線は大丈夫か？
この3/4で充分では…？

帝国陸軍参謀総長 第4代
ヘルムート=フォン
モルトケ伯爵



え〜っ！
1/4ほど左翼に送れ！
なに？
東部戦線が苦戦？
じゃ、東部戦線にも
2個軍団ほど送れ！

—— これほどの快進撃ということは…。

やはり、主力軍(西部戦線右翼)に半分(52.5%)も要らなかったのでは？

よし、東部戦線や陽動軍(西部戦線左翼)にもっと援軍を送ろう！

(*01) 小心者というのは、調子が悪ければ悪いで不安がりますが、調子がよければよいで不安がります。どちらに転んでも不安から逃れられない。小心者とはそういうものです。

…などと血迷いはじめます。

その結果、陽動軍に13%、東部戦線に4%、計17%もの援軍を送り込んでしまい(B-4/5)、

・主力軍(西部戦線右翼)に1/3(35.5%)

・陽動軍(西部戦線左翼)に1/3(30.5%)

・東部戦線軍 1/3(34.0%)

…と、きれいに均等化されることになりました。

典型的な「兵力分散」の愚策だということすらわからない小モルトケ。

愚か、ここに窮まれり。(*02)

これにより、もともとシュリーフェン伯爵が考えていた「主力軍に帝国陸軍の3/4(76.6%)を割く」という各個撃破作戦は、影も形もなくなりました。

その弊害がついに表面化します。

前幕パネル(D-1/2/3)のあたりをご覧ください。

第一軍・第二軍・第三軍・第四軍・第五軍と並んでいますが、よくよく見ると、第一軍と第二軍の間に30~40kmもの間隙ができてしまっています。

兵力が少なすぎて、延びきった戦線を維持できず、「穴」があいてしまったのでした。

「まずいっ！！」

これに気づいた第一軍司令官「アレクサンダー」A、クルック大将(B/C-2)は焦ります。

「ここをフランス軍に突かれたら、我々はおしまいだぞ！」

実際、すでにその間隙にフランス軍(第五軍)が侵攻しつつありました。

クルックは、この「穴」を埋めるべく、あわてて東進し始めます。

これを「クルック・ターン」と言います。(*03)

(*02) 歴史に「もし」はないといわれますが、「もしこのときの参謀総長が小モルトケだったら！シュリーフェンだったら！いや、せめて凡将だったら！」という思いを拭えませんが、よりにもよって、「稀にみる愚将」だったことがドイツを亡ぼすことになりました。

(*03) 日露戦争(日本海海戦)での「トーゴー・ターン」は日本を救いましたが、このときの「クルック・ターン」はドイツの命取りとなります。